



あさだじろう 浅田次郎さんプロフィール

1951年12月13日生まれ。自衛隊に入隊、除隊後はアパレル業界など様々な職に就きながら投稿生活を続け、1991年、『とられてたまるか』でデビュー。悪漢小説作品を経て、『地下鉄に乗って』で吉川英治文学新人賞、『鉄道員』で直木賞を受賞。『蒼穹の昴』『中原の虹』『一刀斎夢録』などの歴史小説も含め、映画化、ドラマ化された作品も多い。日本を代表する小説家。

◎特集 浅田次郎 白河を想う

白河を想う

作家・浅田次郎さんが本市を訪れました。広報では、浅田さんの白河探訪に同行し、浅田さん自身が白河についてどのように感じたかを特集として、皆さんにお届けします。なお、紀行文のため、常体で表記しています。

南湖公園「翠楽苑」から紅葉が色づき始めた風景を、筆で描くようにゆっくりと見つめる人がいる。作家・浅田次郎さんである。一つひとつの所作に目を引かれてしまうのは、人間の悲哀に触れ、それを圧倒的な描写で物語を

紡ぐ作家としての存在感なのか。

浅田さんの「憑神」にこんな一節がある。「人間が全能の神に唯一まさるところがあるとするれば、それは限りある命をおいて他にはあるまい。限りあるゆえに虚しい命を、限りあるからこそ輝かしい命となせば、人間は神を超越する。」

人が人として輝く瞬間を精緻な筆致で描く浅田さんの目には、白河市はどのように映るのか。

稲荷山は、小説を書く前に来るべきだった

浅田次郎さんが白河市を訪れるきっかけとなったのは、10月19日の「浅田次郎講演会」。新撰組の斎藤一を描いた「一刀斎夢録」の著者が、講演会で戊辰戦争「白河口の戦い」の歴史的な意義を市民に語った。

翌日、浅田さんが最初に訪れたのは、白河口の戦いの舞台となった稲荷山。ここは奥州街道から白河への正面玄関にあたる場所で、白河防衛の最終ライン。会津藩にとって戦略上の重要拠点であった。

「この場所は東軍・西軍が対峙したことが想像できる。白河口副総督の横山主税が壮絶な死を迎えた場所に立つと、小説を書く前に取材に来るべきだったなあ。横山が仮に生きていたら、明治政府でどれだけ活躍したかわからない。彼はパリの空を夢みていたんだらうな」

水戸藩最後の藩主・徳川昭武に随行し、輝く瞳で世界を見つめていた横山に想いを馳せた。

東京からこんなに近くに素晴らしい日本庭園があるなんて

次に向かったのは南湖公園。白河藩



■楽蔵「白河見聞館」



■脇本陣柳屋旅館跡



■小峰城跡



■翠楽苑



■稲荷山

◎特集

浅田次郎

主松平定信公が「大沼」と呼ばれた低湿地帯を改修し、庭園とした、日本最古と言われる市民共楽の公園。浅田さんは翠楽苑を巡り、松楽亭でゆつくりと茶をすすった。

「東京からこんなに近くに素晴らしい日本庭園があるのは驚きだね。妻は那須塩原市出身なんだけど、この場所には知らなかった（笑）。茶や菓子の文化

が息づいていることも感じる。本当にいい場所だ」

いつ来ても変わらない白河であってほしい

小峰城跡の石垣崩落を見ながら、前御門を抜け、浅田さんは高台から白河を見渡した。その表情はどこか悲しげになった。

「美しい石垣だったんだろうなあ。直すまで、長い道のりだな」と浅田さんの吐息交じりの声が出た。

その後、新撰組が宿泊した脇本陣柳屋旅館跡、楽蔵の「白河見聞館」を見学した。浅田さんは、正味4時間の白河の旅をもう一度歩くように静かに振り返った。

「歴史のあるまちは古い物を大切にしたい。新しい物を加えていかなくてはならない。古い物を壊して新しい物を作るのはタブー。白河市のような歴史のあるまちは、それを仕事としてほしい。」

私たちの文化は、壊して作って、壊して作ってきた歴史から、目に見える文化が歴史のある海外の国と比べるとやはり少ない。形がある物から、人の精神や思想は生まれてくる。たかが物じゃないかと言っても、そうではない。魂の拠り所が目に見えてある訳だから。小峰城の崩落は、白河の人にとって、その意味で衝撃だったと思う。単に古い石組が壊れたのではなく、心の拠り所を失い、空虚感を抱いているのだと思う。古いものを大切にすることがあって初めて魅力的なまちが形成されると思う」

優しさに溢れる笑みをたたえながら、浅田さんはもう一つ言葉を付け加えた。「いつ来ても歴史を大切にしない変わらないまち（白河）であってほしいな」